# 方向音痴少女は今日も行く！

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
方向音痴少女は今日も行く！

【Ｎコード】
Ｎ５３４６Ｚ

【作者名】
学校嫌い

【あらすじ】
極度の方向音痴を持ち、また極度に可愛いものが好きな少女、百合河菊（りかわきく）。そんな少女が高校生になったら、果たしてどうなるのでしょうか？これは、そんな彼女の日常のお話です。

## 方向音痴少女の朝

カーテンの隙間から差し込んできた陽光で目を覚まし、暫く天井を眺めて体を起こす。両手を組んで体をグッと伸ばすと、なんとも言えない快感を感じる。私はこの感覚が好きだ。

布団を捲ってベッドから降り、鏡の前に立ってどこもおかしな所がないか確認をする。

「よし、問題なし」

伸ばした黒い髪も、どこも跳ねていないし、目の下にも隈は無いし、肌も荒れていない。

水色の布地に猫の柄がプリントされたパジャマを脱いで、ベッドに置き今日から通うことになる高校の制服を取り、袖を通す。ブレザーが多くなった最近にしては珍しく、セーラー服だ。

襟の部分が水色で、白いラインが入っており、一年生であることを示す赤いリボンを結ぶ。襟と同じく水色のスカートを履いて、また鏡の前に立ってチェックする。

「うん。大丈夫」

今日から私は高校生だ！

「おはよう、母さん」

「おはよう、菊。制服、よく似合ってるわね？」

「ありがとう。父さんもおはよう」

下に降りて、台所に入り百合河桜（ゆりかわさくら）、私の母さんと百合河修輔（ゆりかわしゅうすけ）、父さんに挨拶をする。

母さんは、今年で三十八歳になるけど見た目はとてもそうは見えない。何せ身長が百五十二センチしか無いのだから、無理もないけど。

そんな母さんを見ていると、偶に父さんはロリコンだったんじゃないかと思うことがある。成長して、母さんの身長を追い越したからそう思うようになったのかも知れないけど。

私の身長は百六十五センチ。

母さんとは十三センチの差がある。抱えてと言われたら、私でも難なく抱えることができる母さん。父さんが、病気で死んでしまってからは、女手一つで育ててくれた母さん。

今の私にできるのは、少しでも母さんの負担を減らすことだけ。

「母さん、後は私がやるから座っててて？」

「いいのよ。菊こそ、まだ寝て無くていいの？」

でも、母さんはいつも家事は譲ってくれない。今まで、面倒を見てくれたからその恩返しがしたいのにな・・・まあ、料理の腕は致命的だけど。

「うん。最初の日位は早起きしようと思って」

「そんなこと言って・・・たまたま早く目が覚めただけでしょ？」

「う・・・」

流石、十六年間一番近くで見てきただけある。

トントントン、と母さんは包丁を軽快に動かす。悲しいことに、この料理スキルは私に遺伝せず、父さんの料理が苦手な所が遺伝したらしい。

「修くんの形見みたいな物よね」

母さんは、偶に心を読んでいるかの様な発言をする。例えば、今の様に。以前、理由を聞いてみると、何となく表情なんかで分かるらしい。

「そうだね・・・」

母さんは父さんを、修くんと呼び父さんも母さんを桜と呼んでいた。誰の目から見ても、二人は仲の良い夫婦で、娘である私から見てもそうだった。

学生時代の時の話を聞くと、高校一年生の夏頃に父さんから告白して、つき合い始めた様で、最初こそは初々しいカップルとして、クラスメイトどころか先生達からも温かい目で見られていたらしい。

それほど二人はお似合いだったみたいだ。

そして、お互いのことを知っていった。

結婚するまでもしてからも、喧嘩を一度しかしていないと言うんだからすごいと思う。

「まあ、その一度の喧嘩がすごく長引いたんだけどね」

また心を読まれた。

「わかりやすいのよ、菊は・・・そういう所はわたし譲りかも知れないわね。さ、ごはんできたわよ」

いつの間にかお皿に移されていたベーコンエッグを、テーブルに運んで席に着く。母さんは父さんの遺影に手を合わせてから席に着いた。

手を合わせて、いただきますと言って味噌汁を少し冷まして一口飲む。

「相変わらず美味しい」

「ありがとう。それより、学校までちゃんと辿り着けるの？中学校まではバスがあったから良かったけど」

「・・・・・・ダイジョウブダヨ」

壊れたブリキの人形よろしく首をギ、ギ、ギと動かして言う。

「不安だわ」

そう、私は極度の方向音痴なのだ。さすがに右と左は分かるけど、実際に右に行けと言われたら左へ行ってしまう程の。

それに

「それに、途中で猫なんて見かけたら」

それこそ本格的に迷子になってしまう。

方向音痴と同じ、もしくはそれ以上に可愛い物が好きで途中で見かけたら何も考えずにその後を追ってしまい、結果道が分からなくなる。御陰で何度も近隣の人や商店街の人が総動員で私を捜すことになってしまう始末。

「一番遠い時は、隣町まで行ってたものね・・・二駅分もあるのに」

母さんの言う通りで、中学二年生の時のある日の帰り道、とても可愛い猫を見かけてフラフラ～と追いかけていって、気が付いたら隣町まで行っていた。

偶然通りかかった晴(はる)がいなかったら、きっと三日は帰ることができなかったと思う。

「何度も確認したし、この辺は余り猫とかも通らないから大丈夫だって」

「二十回中十八回も迷ったのに？」

「ア、アハハ・・・」

じと目で見てくる母さんの視線に耐えきれず、私は目を反らした。

ごはんを食べ終わって、食器を洗い父さんに行ってきますと言ってから母さんと一緒に玄関へ向かう。

真新しいローファーを履いて、母さんに向き直る。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい。気を付けるのよ？」

「うん」

そう返事をして、家を出て空を見上げると、太陽が燦々と輝いていた。

深呼吸して学校がある左の方へ進み始める。道路の掃除をしている近所のおばさんに挨拶をして、暫く進んでいくと

「ニャ～」

と鳴き声が聞こえて、そちらを見て見たらそこには黒い小さな猫がいた。

「はあ・・・猫ちゃん、おいで？」

チチチ、と舌を鳴らしてしゃがみ込み猫ちゃんに手を伸ばすと、ゆっくりと近づいてきた。そして、私の指をペロペロと舐めてくる。

（はぁ～・・・どうして小動物ってこんなに可愛いんだろう？）

可愛さに悶えていると、猫ちゃんが足にすり寄ってきた。驚かせないようにゆっくりと前足の付け根部分に手を入れて抱き上げると、すっぽりと腕の中に収まる。

「にゃ～」

もうただ鳴くだけでもすごい可愛いよ。

この辺じゃ、あんまり猫ちゃんを見かけることはないのに、今日はついてるな・・・黒猫だなんて尚更だよ。みんな、黒猫が横切ると不吉なことが起こるとか言っているけど、私は猫の中では一番黒猫が好き。

黒い毛並みに、瞳は黄色で奇麗に輝いているから。

それに、よく考えてみれば普段中々会えない黒猫に会えたなら、それは寧ろ幸運だと思う。

「もう少し、こうしていたいけど、そろそろ行かないと遅刻しちゃうから、バイバイだね？」

そう言って、降ろそうとしても猫ちゃんは全く降りようとしてくれなかった。それどころかよじ登ってきて頭の上に落ち着いた。

「おっと・・・学校までだからね？」

「にゃ～」

呑気な声を上げる猫ちゃんを頭に乗せたまま、私は学校に向かって歩みを再開した。

一時間後。

「どこだろう？ここ」

「にゃ～？」

私と猫ちゃんはどういう訳か森の中にいた。

どうして？

## 方向音痴少女の遅刻

「ん～・・・これは、またやっちゃったかな？」

しまったなぁ・・・道はちゃんと覚えているつもりだったんだけど。どこで間違えたのかな？

「とりあえず、家に連絡を・・・ん？あれ？」

「み？」

家に連絡を取ろうと思って、鞄から携帯を取り出そうと手を突っ込み中を漁る。でもいっこうに見つからず、ポケットにも入っていなかった。

「家に・・・忘れた・・・」

ガク、と木が生い茂るどこだか分からない森の中で膝と手を付き項垂れると、猫ちゃんが頭から落ちてしまった。なんとか無事に着地して、私を慰めてくれているのか手を舐めてくれる。

「ありがとう、猫ちゃん。・・・こうしていても何も始まらないし、とにかく歩こうか」

抱え直して頭に乗せ、とりあえず来た道を引き返すことにした。のは良かったけど、何とか森を抜け出した時には体感で一時間が経過していた。

これじゃ、入学式は終わってるな・・・まさか、初日から遅刻することになるとは思わなんだ。

猫ちゃんに会えたから良いけど。

少し歩くと、道があったからそこを道なりに進んでいくことにした。

なんか途中で、猫の像とか猿の像とか、いかにもな雰囲気を醸し出している神社とか色々あって、猫ちゃんがいなかったら怖くて泣いてたかも知れない。

家も結構あったけど、学生が多いのか、お年寄りが多いのか道には殆ど人がいなくて、途中で道を聞こうと思った家に限って誰もいなかったりした。その後、三件程回った所でやっと起きている人に巡り会えた。

「なに？」

その人は、染めているのか地毛なのか分からないけど、真っ白な髪をしていて、けど不健康な感じはしない青年だった。多分、私と大して年は変わらないと思う。

若干つり上がった蒼い瞳に、見た目よりは鍛えられていそうな締まった体。

て、私は変態か！

「あ、あの・・・私、水蓮高校に行きたいんですけど、場所分かりますか？」

「水蓮高校？え、ちょっと待て、今日って何日だ？」

「え？四月八日だけど、それが・・・って、どこいくの？」

質問に答えると青年は慌てた様子で中に引っ込み、その後すぐにバタバタと騒がしい音が聞こえてきた。

「どうしたんだろうね？」

「にゃ～」

猫ちゃんに聞いていると、その間に準備が済んだのか青年が戻ってきた。水蓮高校の男子の制服を着て。

何故か女子はセーラー服で男子はブレザーなんだよね・・・ちなみに色は紫で、ズボンは縦線と横線が入ったチェック柄。

「え？あなたも水蓮高校なの？」

青年はそうだよ、と乱暴に答えながら家の鍵を閉めてかけだした。

「案内するから、付いてこい！」

「え！ちょ、待ってよ！」

猫ちゃんが落ちないように、頭から降ろしてしっかり抱えながら後を追いかける。

春先とは言え、陽が照っている中で走るのは疲れる。

必死で青年の後を追いかけながら、次第に見慣れた場所に出てきて、桜が舞い散る商店街に出た。

「ん？菊ちゃんじゃねえか、学校はどうした？」

「今向かってるとこ！」

「は？」

「おい、話してる暇があるなら速く走れ！」

「分かってる！おじさん、また後でね！」

おじさんに手を振って、文句を言いながらも待ってくれていた青年の元へと走っていく。それからも、八百屋のおばちゃんや魚屋のおじちゃんに声をかけられたけど、全部後でね、と言って走った。

暫く走り続けて、漸く学校が見えてきた。

「着いた！」

校門の前で声を上げると、青年に静かにしろと軽く頭を叩かれた。

「そういえば、あなた名前は？私は百合河菊。この子は・・・モモちゃん」

「は？モモ？・・・まあ、いいや、オレは千同修輔（せんどうしゅうすけ）」

「え？」

一瞬聞き間違いかと思ったけど、そうじゃない。本当に父さんと同じ名前なんだ。

でも、当たり前か。

同じ名前の人なんて探せばいくらでもいるだろうし。私はまだ同じ名前の人とは会ったこと無いけど、いや会いたい訳でもないけど。

「修くんって呼んでもいい？」

「あ？まあ、呼び名なんか何でもいいが。じゃあ、オレは先に行くぞ？」

「あ、まってよ、私も行く。モモちゃん、建物の中には入っちゃだめだからね？」

「に～」

桜の木の下に降ろすと、どこかにトコトコと歩いていった。敷地から出るつもりはないみたいだ。

さて、私も速く行こう。

と思って足を前に出すと襟を掴まれた。

「どこに行くつもりだ？そっちは外だろうが」

「あ・・・いや～、ごめんごめん」

修くんに引っ張られて、私はやっと校内に入ることができた。

恐らく先輩達だろう人達が、グランドで走ったりしていたけど、中にはあまり人影が無い。入学式はとっくに終わっているんだから仕方ないけど。

職員室まで修くんに腕を引かれて連れて行かれて、ドアの前で修くんの方から手を離した。

中に入り、どの先生か分からないから、とりあえず奥に座っている先生に新入生であることを伝えると遅刻してきた二人かね、と眼鏡を光らせて言われた。頷くと、特に何を言われることも無く一年B組だ、と言われて、私たちはB組に向かった。

教室の扉を開けて中に入ると、もうとっくにみんな帰ってたと思ってたけど真ん中の席に一人だけ女の子が座っていた。縁なしの眼鏡をかけていて、小さな文庫本を読んでいる。

髪の色は茶色で、目の色は赤。

何も言わず私たちの方を向いて、また本に目を落とす。

黒板に貼ってあった座席表を見ると、まだ空いていることを示しているのか、二カ所だけ白くて、後は全部赤い線が引かれていた。窓際一番後ろとその隣が空いていて、私が窓際に座った。

「あ、狙ってたのに！」

「早い者勝ちだも～ん」

「く、まあ、いいか。ここなら寝てもバレ無いだろうし。にしても、

あれだな、来た意味なかったな？」

「そうだね・・・そういえば、修くんはどうして日付聞いてきたの？もしかして一日勘違いしてたとかじゃないよね？」

「・・・・・・分かってるなら聞くなよ」

「・・・なんか、ごめん」

「いや」

頬杖をついて、そっぽを向きながら言う修くんに謝るとそう返ってきた。

特にすることも無いから、私も両手で頬杖をついて足をブラブラさせて、偶に窓の外を見ながら過ごしていた。

「修くんさ・・・部活とかするの？」

「なんだ、いきなり。しねえよ、面倒だし」

「そっか・・・あ、携帯持ってる？」

「ああ」

答えてブレザーの内ポケットから紫の携帯を取り出す修くん。

「ちょっと貸して？番号とメアド書くから」

「は？んなことしなくても、赤外線で交換できるだろ？」

「私今日携帯忘れちゃったんだぁ・・・それで、道に迷っても連絡取る手段が無くて、道なりに歩いてたら修くんの所にたどり着いたの」

「迷うか？普通」

「方向音痴なもので」

「ああ、それでさっきも外に行こうとしてたのか。いくら何でも馬鹿すぎるだろ」

そんなバッサリ斬らなくても・・・。

差し出された携帯を受け取り、鞄からメモ帳を取り出してメモする。それを千切って胸ポケットにしまい、今度は自分の番号とメアドを書いてそれを渡す。

「よく覚えてるな？」

「修くんは覚えてないの？」

「番号くらいは覚えてるが、メアドとなるとそんなスラスラとは出てこねえよ。使う機会も殆どないからな」

「どうして？」

「する相手がいなくてな」

「成る程ね・・・」

時計を見ると、時刻は十時半を指していた。

また、静かになった教室の中で、女の子が本を捲るパラ、という音がやけに大きく聞こえた。

## 方向音痴少女のお昼

外を見ながら、ふと風に当たりたいな、と思って窓を開けた。桟に腰掛けて風に揺れる髪を押さえていると、下から鳴き声が聞こえた。

「あ、モモちゃん」

「ん、さっきの猫か？」

「どこ？」

「ひゃ！びっくりした」

いつの間に席を立ったのかも分からないほどの早さで私の隣から顔を出して、外を見る眼鏡の女の子。後ろを見ると、修くんもあまりの早さに驚いている様だった。

「猫、どこ？」

「え？あ、下」

モモちゃんは下から私を見ていたから、指をしたに向けて指し、私もそこを見た。

でも、

「「いない」」

そこにモモちゃんはいなかった。

「上だよ。気付けアホ」

「上？あ、ホントだ」

修くんに言われて、上を見ると、モモちゃんが身を乗り出して私を見ていた。踏ん張っているのか、体がプルプルと小刻みに震えていて、そんな頑張っているモモちゃんを見ると和む。

手を上に持って行き、ちゃんと上に乗せて眼鏡の娘にここだよ、と示して言うと、女の子はモモちゃんをじっと見つめた。

座っていたから分からなかったけど、この子は私よりも身長が低かった。どれくらいかと言うと、母さんくらい。だから、十センチ近くは身長差があることになる。

と、それはそうとして

「モモちゃん、いつの間に頭に乗ったんだろう？修くん見てた？」

それが疑問だった。

だって、全く気が付かなかったし。

「お前が驚いてる間に乗ってたぞ？」

そうだったんだ。

速いな、モモちゃん。

「前世は忍者かもね～」

「ゴロゴロ」

上に手を持っていき、頭を撫でながら言うと、気持ちよさそうに喉を鳴らした。

「その子、モモっていうの？」

「うん。なんか、ぴったりな気がして・・・あ、私は百合河菊。で、あっちが修くん。貴女は？」

なんか、なんでオレは短縮されてるんだよ、とか聞こえたけど今は無視無視。

「海野華（うみのはな）」

「華ちゃんか。これからよろしくね？」

華ちゃんはこくりと頷いた。

うん、静かな子だ。

「オレは千同修輔な？断じて修くんが名前じゃねえぞ？」

「え～・・・いいじゃん、修くんで」

「お前は良くてもオレは良くねえ」

と、そこでグゥ～・・・と誰かのお腹が鳴り、腹減ったあ、と修くんが天井を仰いで言った。発生源は修くんらしい。そういえば、今日はお弁当を持ってきてないんだった。

「私もお腹すいたな・・・さっき走ったからかな？」

「それしか考えられねえよ・・・オレなんか朝飯食おうとした所でお前が来たんだぞ？」

「日付間違えてるからでしょ？それより、どうする？ごはん買いに行く？」

「そうだな・・・なあ、海野、学食の場所とか分かるか？」

華ちゃんは頷いて、付いてきて、と言うように歩き出した。

「モモちゃん、すぐに戻ってくるから待っててね？」

「にゃ～」

「よしよし」

桟に降ろして言うと、ちゃんと返事をするモモちゃんの頭を撫でて、外に降りたのを確認して先に行っていた修くん達の後を追う。

危なかった、もう少しで見失う所だった。

「待ってくれても良いのに」

「校内でも迷うのか？お前は」

「ふふん。中学校でも一日一回は迷子になってた」

「威張ることじゃない」

「全くだ」

「う・・・二人とも冷たい」

心にぐっさりと刺さったよ。

迷うことなく進んでいく華ちゃんの後に付いて、校内を進んでいき数分歩いた所で学食に到着した。私は、まずは学校の構造を少しでも覚えておこうと思い、壁に掛けてある地図を見た。

ここ水蓮高校は、北と南の二つの棟に分かれていて、北に普段の授業を行う教室があって、南は科学や生物の実験に使う教室や音楽に使う教室がある。二つの棟の間には庭があって、そこでご飯を食べることもできるらしい。

ご丁寧にそう書いてある。

それから、二つの棟とは別に図書館がある。ここの図書館はかなりの蔵書量があるのか、一棟まるまる図書館に使っている。一体何冊の本があるんだろう？

体育館はグラウンドの隣にあって、他にもテニスコートとかもある。強いのかな？四面もあるなんて・・・それとも単に人数が多いだけかな？

まあ、いいか。

職員室は一階の奥にある。

学食も同じく一階で、職員室とは反対の位置にあって、気合いを入れる所が間違ってると思う。外には日傘付きのテーブルまであった。

とりあえず地図は見終わったから、私も何か買おうと思って券売機に向かった。

「どれにしようかな？」

後ろには誰も立っていないから、ゆっくり考えて決めることにして、上の列から順に見ていく。

唐揚げ定食にしようと決めて、五百円硬貨を入れてボタンを押そうとした所で、

「あ、母さんが待ってるか・・・」

昨日、今日はお昼前には帰るからと言ったら、お昼ご飯作って待ってるからね、と言っていたのを思い出した。

「無駄遣いはしちゃ駄目だよね・・・」

払い戻しのレバーを引こうと手を伸ばすと、後ろから声をかけられた。振り向くと修くんと華ちゃんがパンを持って立っていた。

「あ、少し待って。お金戻したら・・・」

「あ」

「え？」

言っている途中で修くんが後ろを見て声を上げ、直後聞こえてくるピ、という機械音と小銭が落ちてくる音。振り向くと、私よりも五センチほど高い女子生徒が立っていた。

キャンディなのか、小さな白い棒が口から出ている。

赤い髪がワイルドに跳ねていて、前髪は二本の黄色いピンで留められている。

瞳の色は蒼で、少しつり上がっている。

「て！何勝手に人のお金で券買ってるの！」

呑気に観察なんてしてる場合じゃない。しかも、この人が買った券には四百円と書かれている。つまり、お釣りは百円だけ・・・ああ、四百円も無駄に使ってしまった。

「ん？だって、お前そいつらと話してたし、別にいいだろ？」

「良くない！はあ・・・もういい、この百円も貴女にあげる。行こう、修くん、華ちゃん」

「おい！いいのか、何も買わなくて」

「母さんが家でご飯作ってるから、いいの」

乱暴に答えて学食を一人さっさと出て行き、教室へと歩いていく。

「そっちは職員室だ」

また、襟を掴まれて、動きを止められる。それから、今度は手首を握られてそのまま華ちゃんの後を歩いていく。

視界の隅で、さっきの人が百円を指で弾いて遊びながら私たちを見ているのが見えた。

やっぱり百円は取っておくんだった・・・。

教室に着いた所で、窓によりモモちゃんを呼ぶと、近くにいたのかすぐに出てきてまた私の頭に飛び乗ってきた。流れでなんとなく、華ちゃんも私の前の席の椅子を回転させて座り、メロンパンをもくもくと食べ始める。

「お前、帰らなくていいのか？お袋さん、待ってるんだろ？」

「・・・・・・一人で帰れるか不安」

「お前、家にすら帰れないのか？」

修くんは呆れながら言ってきた。確かに学校から家まではそんなに曲がったりする訳じゃないけど、朝があれだったからどうしても不安になる。商店街の人達の手を煩わせる訳にもいかないし。

でも、早く帰らないと母さんも心配してるだろうし・・・。

「なんとかする」

「はあ・・・少し待ってろ、分かる所まで送るから」

「え？いいの？」

「それくらいはな」

言って、修くんはすぐにパンを食べた。席を立ち鞄を肩に掛ける。

「じゃ、行くか。海野・・・も帰るみたいだな」

「え？おお、いつの間に」

華ちゃんを見ると、どうやったのか既に鞄を右手に持っていた。でも、口元にチョココロネのチョコが付いていた。

近づいて、人差し指でそのチョコを取り舐める。

「ん、甘い。じゃ、行こうか？」

「お前・・・まあ、いいか」

「ん？あ、モモちゃんはまた外で待っててね？」

「にゃっ」

元気な返事をして頭から飛び降りたモモちゃんを見送り、窓を閉め

て、今度は最初から修くんに手を引かれて三人で歩き始めた。私はそんなに信用がないのだろうか？

そう思いながら、前を歩く華ちゃんを見ると、耳が赤くなっていた。

「華ちゃん、赤いけど大丈夫？熱あるんじゃない？」

「問題ない」

「そう？」

「アホ」

引っ張られながら、何故か修くんにアホ呼ばわりされてしまった。

どうしてだろう？

## 方向音痴少女の下校

「どうして付いてくるの？」

「暇だから」

私たちが昇降口で待っていたモモちゃんと一緒に校門から出ると、何故か私の五百円の内四百円を勝手に使った人が柱に寄りかかっていた。その時にリボンが見えて、とりあえず先輩と言うことは分かったけど、敬語は使わないことにした。理由は使いたくないから。

「おい、百合河、そいつに気を取られて手を離すなよ？」

「あ、うん」

「そういや、お前ら、教室戻る時もそんな感じだったな？なんだ、つきあってるのか？」

「違えよ。こいつ、目を離すとすぐにあらぬ方向に行くんだ・・・昇降口が目の前にあるのに、校門の方に行ったりもしてたからな」

「修くんだって、日付勘違いしてたでしょ？」

そういうと、修くんは少し言葉に詰まって、結局

「うっせ」

としか言わなかった。

歩いているのは商店街で、何度か朝のおじさんやおばさんに声を掛けられて、何分か話したりしていた。話している間くらい大丈夫と思うけど、修くんはその間も手を離さず、そのことに付いて色々聞かれたりした。

「菊ちゃんのいい人かい？」

私が違いますよ、と言おうとすると

「そうなんですよ。学校の中でも手を繋いでて、見せつけてくるんですよ？」

と、えっと・・・名前の知らない先輩が言った。

「違う。単に彼女が方向音痴だからそれを防止しているだけ」

でも、それを華ちゃんが短くけど簡潔に否定した。

「なんだい、菊ちゃんにもやっと春が来たかと思ったんだけどね・・・あ、そういえば、晴ちゃんから何か連絡はあったかい？」

「いえ、まだ何も」

「そうかい・・・ま、気を付けて帰りなよ？」

「はい」

話は終わったので、私たちは手を振っておばさんと別れた。

そして、また歩いている途中後ろにいる先輩が、さっきの晴ちゃんて誰のことだ、と聞いてきた。

「わたしも気になる」

「にゃ～」

モモちゃんも気になるのか、単に鳴いただけなのか。修くんは何も言わず手を引いている。

「私の幼馴染み。中学生の時は近くに住んでたんだけど、卒業したあと、なんか、特訓だー、とか言ってジャージでどこかに走って行っちゃったの」

「何も持たずにか？」

「いくら何でもそれは無いと思うけどな・・・」

「それが・・・ホントにジャージを着てただけで、財布とかを持ってる気配も無かったんだよね」

「「・・・・・・・馬鹿だろ」」

修くんと先輩の声がハモった。

「あ、ちゃんて付いてるから分かると思うけど、女の子だよ？」

「「は！？」」

「あの人がそう呼んでいるだけだと思った」

勢いよく振り返った修くんと、先輩の驚きの声。それと華ちゃんの声。なんか賑やかだな～、と思った。

モモちゃんは偶に舞っている桜の花びらにパンチをしたりしているのか、時々ニャッ！ニャッ！という鳴き声が聞こえる。

「昔から元気な子なんだよね・・・思い立ったら吉日をそのまま体現しているっていうか、まあ色々巻き込まれたりもしてたけど。後、陸上の大会を総なめしたりとか」

私が知ってる限りでも、晴ちゃんは風邪を引いたりしたことが無いし、小中の九年間無遅刻無欠席だった。高校は、色んな所から推薦の話が来ていたみたいだけど、それを全部蹴って水蓮高校を受験した。

結果は、合格だったけど、通う前にどこかに行っちゃった。

「まあ、今もどこかで元気にしてると思うよ？」

というか、元気な姿しか知らない。

唯一心配な点は、彼女が寂しがり屋なことなんだけど、とりあえず何かが近くにあればそれで紛らわすことができるから、大丈夫だとは思う。

「あ、そうだ・・・あたしの名前は海野柊（うみのひいらぎ）。華はあたしの妹だ」

「「・・・・・・は！？」」

今度は、私と修くんが驚いた。

だって、似てる所が全然無いし・・・と思っていると、先輩が話し始めた。

「やっぱり聞いてなかったんだな・・・学校で会っても声すら掛けてこないから、無理もないが。それはそうと、学食で見た時と出てきた時は意外だったよ。華が他の奴らと一緒にいる所を、あたしは見たことが無かったからな」

そう言って、華ちゃんの頭にポンと手を置く先輩。そのまま、少し乱暴に撫でられて、けどどこか嬉しそうな顔をしている華ちゃん。この光景を見ていると、確かに二人は姉妹だってことが分かる。

「お前達、今日が初対面だろ？なのにこいつが懐くなんてのは、相当珍しいぞ？まあ、その猫に興味が沸いたんだと思うが」

私の頭に乗っているモモちゃんを見ながら、先輩は言って、隣では華ちゃんも、モモちゃんを見ていた。

それから先輩はスカートのポケットに手を突っ込んで、何かを取り出し私に投げてきた。反射的にそれを取り、見ると百円だった。

「さっきは、悪かったな。それは返す」

「・・・・いいよ、別に」

「それから、敬語を使え」

「それだけは断る」

私は笑顔で拒否した。

「ああ、オレもあんたには敬語は使わいんで、あしからず」

「たく、かわいげのない奴らだな」

「菊は可愛い」

「え？何かいった？」

「なにも」

華ちゃんがボソ、と何か言って聞き返すとそう返ってきたから、私はまた前を向いて修くんに手を引かれながら歩いた。

それから、家までの道なりを説明しながら歩いたけど、先輩が私の道案内で大丈夫なのかと言ったので、修くんの携帯を借りて家に連絡を入れることにした。

電話に出た母さんに、事情を話そうとすると迷ったことは分かっていたみたいで、道を説明してくれた。それから、電話を修くんに替わると、母さんは少し驚いたのか、その声が離れていても聞こえてきた。

母さんの言う道順を四人と一匹で進んでいき、十分後、無事家に到着した。

「え？いえ、そんな・・・あ、はい・・・はい、分かりました」

修くんが何かを母さんと話していて、最初は遠慮していたみたいだけど、最後は頷いて電話を切った。

「どうかしたか？」

「お前のお袋さんが、折角だから寄って行けってさ・・・いいのか？」

「ん？かまわないけど？」

別に何がある訳でもないし。

こうして、三人は母さんに招待され、家に寄ることになった。

とりあえず、無事に帰ることができて良かった。

明日からは携帯を忘れないようにしないとね。

## 方向音痴少女の友達

家に入ると、母さんが玄関で待ってくれていた。私がただいまと言うと、母さんもお帰り、と返してきて、手には私の携帯を持っており今から鞄に入れておきなさいと言われた。は～い、と返事をして鞄のポケットに携帯を入れて、修くん達に向き直ると

『・・・・・・・』

三人とも揃って、間の抜けた顔をしていた。

「あ、母さん、この人がさっきの電話の人」

手で示しながら紹介し、次いで後ろのいる華ちゃんと柊さんも紹介する。そして、母さんが多分お礼か何かを言おうと、口を開き掛けた時、

『母さん！？』

と三人が大声でハモった。どうでもいいことだと思うけど、華ちゃんも大声を出したのが意外だった。

「まあ、確かに驚くわよね・・・見た目中学生に見えても不思議じゃないし。どうぞ？」

リビングに通して、父さんにただいまと言ってテーブルに掛けると、母さんがお茶を五人分出してくれた。モモちゃんのことは、多分自分で責任を持ちなさい、と言うことだろう。何も言わなかった。

お茶を勧められて、修くん達は一口飲んでホッと一息ついた。

母さんの煎れるお茶って、普通のお茶の筈なのに何故かリラックスできるんだよね。

「身長が中学生の時で止まっちゃってね・・・それからはずっとこの身長よ。まあ、その御陰で修くんに肩車されても周りからは兄妹に見えてたから、良かったけどね」

「え？オレ？」

「え？」

「あ、この人、名前が千同修輔っていうの、それで私が修くんって呼んでるから・・・父さんの名前の修輔なんだよ？」

「そりゃ、面白い偶然があったもんだな」

柊さんがモモちゃんの頭を撫でながら言った。

「ホントね・・・全く似ている所なんて無いけど、どうしてかしら。何か・・・」

「うん・・・何かが、似てる感じだよね？」

「ええ」

父さんに挨拶をした後、座っていた修くんを見た時、何故か一瞬父さんと姿が重なった。単に座っている場所が父さんの席だったからなのか、父さんを見た後にその場所を見たからなのかは分からないけど・・・母さんも何かを感じたみたいだった。

「自己紹介がまだだったわね。わたしは百合河桜。菊の母親よ」

お茶の入ったグラスをおいて、母さんは自己紹介をした。

「海野柊だ」

「海野華」

「百合河に言われたけど、一応・・・千同修輔ッス」

三人もそれぞれ自己紹介をする。

「修くんと華ちゃんは、同じクラスで、柊さんは先輩・・・尊敬はできないけど」

「あ？今なんつった？」

「別に何も？」

小声で言ったのに、聞こえた様で立ち上がる柊さん。けど、母さんに宥められてまた席に着く。と、そこで私のお腹がクゥ～・・・と鳴った。

「っ！」

バッとお腹を押さえても時既に遅し。バッチリこの場にいる全員に聞こえてしまった。

「そういえば、お昼まだだったわね。みんなも食べる？お好み焼きにするんだけど」

「ホント！？」

「ええ、昨日話を聞いた時から、菊の好きな物を作ろうって決めてたのよ」

「やったー！・・・あ」

椅子から立ちあがって両手を天井に掲げて喜びを表現して、そういえば修くんたちがいるんだったと思い、見ると修くんと柊さんがニヤニヤしながら私を見ていた。心なしかモモちゃんも笑っている気がする。

華ちゃんは、見てませんよ、という風にそっぽを向いていた。

止めて！それが一番辛いの！

「子供だな」

「うっさい」

「ふふ。それで、みんなはどうするの？」

柊さんと私のやり取りを見て頬笑み、母さんは改めてみんなに聞い

た。

「こいつがそんなに喜ぶってことは、美味いんだろうからな・・・頂くよ」

「なんでそんな偉そうなんだよ？」

「お前は気にならないのか？」

「・・・なるけどさ」

「わたしも頂きます」

「分かったわ。少し待っててね？」

「あ、手伝いますよ」

修くんが先に席を立った母さんの後を追って行った。

「あら、気を遣わなくてもいいのよ？」

「違いますって。オレ、一応一人暮らしなんて、料理は大抵できるんッスよ？」

「え！？うそ！」

「菊は料理がからっきしなのよ」

「あ～・・・何となく分かるッス」

「ちょ！どういう意味？！」

それには答えず、母さんと修くんは台所に並んで立ち準備を始めた。

それにしても、料理までできるなんて、ホント父さんとは似てないな・・・他の所も、反対だったりするのかな？

私たち百合河一家は、三人揃って黒髪だ。そして、修くんは全く正反対の白髪・・・地毛かどうかは分からないけど。

じっと見ていたからだろうか？母さんが一瞬だけ私を見て、何かを修くんに聞いた。

何だろう？

まあ、いいか。

「料理がからっきしね・・・」

「なにか？」

「いや、別に？」

さっきのお返しと言わんばかりにとぼける柊さん。

「姉さんも料理は全くできない」

「なっ！こら、華！」

「ふうん」

「な、なんだよ？」

「別に？」

言うと、悔しそうに拳を握る柊さん。

「似たもの同士」

「「断じて違う！」」

「ピッタリ」

「「偶々よ（だ）！真似しないでよ（するな）！！」」

私たちは睨みあって縄張り争いをする猫の様に威嚇し合った。

＊

「何やってんだかな？あの二人は」

お好み焼きの元が入っているボウルをゆっくりかき混ぜながら、ため息混じりに言うと隣に立っている百合河のお袋さんがくすくすと笑っていた。さっき、この髪が地毛かどうか、聞かれたが何だったのだろうか？

ちなみに地毛だ。

オレの一家はどういう訳かみんな髪は白い。余程先祖の血が濃いのだろうか？

「どうか、したんすか？」

「ふふ、いえね？あの娘が、ちゃんと学校に辿り着けるのかだけでも不安だったのに、まさか初日からお友達を連れてくるなんて思ってなかったから・・・無事に着いたみたいで良かったわ」

「あ～・・・あいつ、朝見事に迷ってましたよ？まあ、その御陰でオレも今日が始業式だって、分かったんですけど」

「あら、そうだったの？迷惑を掛けちゃったわね？」

「いえ、結構楽しかったッス」

これは本当のことだ。小中の時は、この髪の御陰で、教師からは喧しく言われたり、不良からも多少絡まれたり、避けられたりと色々あったが、あいつは何も言わず接してくれたしな・・・何より、気を遣わなくていい相手というのは、久しぶりだったし。

海野姉妹も、特に何か言って来たりはしないからな。

百合河のお袋さんも。

「あら、そうなの？」

「はい。こう言っちゃ、なんですけど・・・あいつが方向音痴で良かったって思いました」

「聞いてたの？あの子のこと」

「はい。本人は特に気にしてないみたいッスね？」

「そうね・・・それがあの子の長所でもあって短所でもあるかも知れないわね」

「そうッスね」

未だにらみ合っている二人を見て、オレとお袋さんは暫く他愛のない会話をしていた。

＊

「さ、できたわよ～」

「待ってました！」

「な！おわ！」

母さんと修くんがお好み焼きを持ってきて、そっちをバッと振り向くと、柊さんが倒れた。何やってるんだか。

「柊さん、あまり暴れないでくださいね～？」

「く、この」

「姉さん、おとなしくして」

「・・・たく、分かったよ」

「にゃ～」

モモちゃんが、またいつの間にか私の頭に乗っていた。ホントに気付かないんだけど・・・。

全員に配って、手を合わせて頂きますと言って、後はお好みでね、と母さんはソースやマヨネーズをテーブルにおいた。

マヨネーズをかけようと、手を伸ばすと誰かの手とぶつかり、見ると柊さんだった。

「私が先」

「いいや、あたしだ」

「私！」

「あたしだ！」

「やっぱり似たもの同士」

「「違う！」」

「いや、似てるよ、おめえらは」

「そうね」

まさかの修くんと母さんにまで言われた。

その後、昼食はとても賑やかに進み、どういう流れか三人は今夜家に泊まることになった。

まあ、いいか。

楽しそうだし。

と、思いの外楽しみにしている自分がいた。

## 方向音痴少女の入浴

「どうして、一緒に入るかな？」

「広いんだから良いだろう？ケチケチすんな」

「だからって浴槽に三人で入ることはないと思う」

「「・・・・・・・」」

私がお風呂に入ろうとしたら、何故か先に柊さんと、柊さんに引っ張ってこられたであろう華ちゃんがいた。流石に修くんはいなかったけど。

まあ、結局流れで一緒に入ることになり、順に体を洗ったのは良いけど、その後、何故か三人一緒に浴槽に入った。いくら広いって言ってもね？限度はあるんだよ・・・

「三人は、狭い」

全く以て華ちゃんの言うとおり。

「だいたい、柊さんは考えが単純なんだよ・・・普通に考えれば三人は狭いこと位分かるじゃん」

「ハッ。学校にもまともに辿り着けないお子ちゃまに言われたくないね」

「それはすいませんね？なにぶん、そちらより少しばかり子供な物で」

「ホントに子供だな？出るとこは出てないし」

「なによ！」

「なんだ！」

「二人とも、わたしを挟んで怒鳴らないで。うるさい」

「「あ、すいません」」

立ち上がってすぐ華ちゃんに言われて、私と柊さんはゆっくりと、また湯船につかった。学校でもそうだったけど、華ちゃんってハッキリスッパリ言うから、反論の余地がないんだよね。と、考えていると視線を感じ、見ると柊さん私を睨んでいた。

その目は、お前の所為で怒られただろ、と言っていた。

その目にお互い様でしょ、と返すと先に吹っかけてきたのはお前だろ、と返ってきた。

乗ったのはそっち、と返す。

て、なんでこんな目で会話してるんだ私たちは。

「あ、華ちゃん、私たちのクラスの先生ってどんな人？」

職員室に行った時も離したのは教頭先生だけだったから、担任どころか他の先生すら分からないんだけど・・・。

「黒いスーツを着た女の人。自己紹介で、友達がいないから仲良くしてください、と言っていた」

・・・・どうなんだろう？それは、先生として、というかそんなことを自己紹介で言うのは。

「貴女と千同くんがいつまで経ってもこないから、何かあったのかと終始心配していて、最後は半泣きだった」

「うん、来週はまず謝りに行こう」

修くんに引っ張って貰って。

「全く、なにやってんだかな？」

「そういえば、柊さんの担任はどんな人なの？」

挑発っぽいことを言われたけど、乗るとまた華ちゃんに怒られるから話しを変えた。華ちゃんがいない時ならいつでも受けて立つけど。

「ん？まあ、普通の奴なんじゃないか？」

「知らないの？」

「興味もないからな・・・それに、教師だろうと何だろうとあたしに近づく奴なんて、物好きはいないよ」

「そうかな？」

確かに言い合ってばかりだけど、この人は一緒にいても嫌な気分になる人じゃない。出会いはあんなだったけど・・・うん、それはおいておこう。思い出すと少しむかつくから。

「私は柊さん、別に嫌いじゃないけど？」

気を遣う必要がないし、華ちゃんのお姉さんで先輩ということしか知らないけど、なんかそんなのどうでも良いとも思うし。

「あたしのことを知ったら、すぐに嫌いになるさ」

「ならないよ」

「・・・どうして言い切れる？」

「勘」

なんだよそれ、と柊さんは吐き捨てる様に言って立ち上がった。続いて私と華ちゃんも立ち上がる。蓋をして、脱衣所でまた少し話しながら、体を拭いてパジャマを着る。柊さんは私のパジャマを着て貰って、華ちゃんは母さんの服を着て貰った。

脱衣所から出ると、そこではモモちゃんが座って待っていた。私を見て、すぐさま頭に飛び乗る。まさか一足飛びとは、流石猫。でも、すぐに降りた。

「にゃ～」

「濡れているから」

「あ、成る程」

納得して、抱きかかえると、すっぽりと腕に収まった。

リビングに入ると、母さんと修くんが楽しそうにおしゃべりをしていた。

「母さん、上がったよ？」

「あ、ええ。修輔くん、先に入る？」

「いえ、オレは最後で良いッス」

「そう？じゃ、先に頂くわね？」

「はい」

それから、母さんはリビングを出て行った。テーブルに座り、何を話していたのか聞くと、私の小さい時の話しなんかを聞いていたらしい。そんなの聞いても、なんの得にもならないと思うけど。

「中学ん時に、二駅離れた隣街まで行ったんだって？」

「そうなんだよね・・・晴ちゃんがいたから良かったけど、一時はどうなるかと思ったよ」

「ある意味すげえな・・・あ、そういやさっき、お袋さんにこの髪が地毛かどうか聞かれたんだけど」

急に話しを変えて、修くんはそう言った。多分、準備をしていた時だろう。何か母さんが修くんに聞いていたし。

「あ、それ私も気になってた。地毛なの？」

修くんは頷いた。

「オレの一家は、どういう訳か親父もお袋も白髪なんだよな」

家とは反対だ。

「最初は、染めてんのかと思ったぞ？」

「その所為で、小中は面倒なことが結構あったんだよ。だから、喧嘩も少しくらいならできるが、人を殴るってのは余りいい気分じゃねえな」

「それは至って普通の感情」

「・・・・・・だな。なあ、トランプかなんかねえのか？ずっとおしゃべりってのは、疲れるんだが」

「私はそれでも良いけどな」

別に色々話すのは苦じゃないし。

まあ、お友達のリクエストには答えましょう。

ちょっと待ってて、と言って、私はトランプを取りに自室に向かっ

た。流石に家の中では迷子にならないから、数分でリビングに戻ってくることができた。

「なんだよ、また迷うかと思ってたのに」

「ご期待添えなくてすいませんね」

「全くだ」

「まあ、来週からは、絶対迷うからもし遭遇したら案内してくださいね～」

「会わないことを祈るよ」

それからトランプをして、華ちゃんが無双した。

「こいつにカードゲームとか、させたら絶対に勝つんだよ」

華ちゃんの意外な一面を知った瞬間だった。

その後、上がった母さんと入れ替わりで修くんがお風呂に入り、上がって来た所で五人でトランプをした。うん、まあ・・・強いね、華ちゃん。

## 方向音痴少女の就寝

「あのさ・・・さっき、学習しなかったの？」

「いいだろ？何とか入ってるんだから」

「すぅ・・・すぅ・・・」

私と華ちゃんと柊さんの三人は、今同じベッドに川の字になって寝ている。電気はまだ点けたままだけど、華ちゃんは寝付きが良い様で、すぐに眠った。

だから、私と柊さんは小声で文句を言い合っている。

ちなみに修くんは父さんの部屋で寝ることになっているけど、まだ全く眠くないようでリビングで母さんと話している。結構気が合うみたいだ。

モモちゃんはも、今は下にいる。

「まあ、いいけどさ・・・落ちても知らないから」

「残念だったな？あたしは一度もベッドから落ちたことはないんだよ」

「なんだ。つまんないの。そういえば、柊さん達の母さんと父さんはどんな人なの？」

「・・・・・・」

そう聞くと、柊さんは天井を見たまま黙ってしまった。聞いちゃいけなかったこと、かな。

「謝らないんだな？」

「謝っても、発言を無かったことにはできないよ」

「・・・確かに」

笑いながら、言って、柊さんは一言、

「―――死んだよ」

と答えた。

柊さんが中学一年生の時、両親は仕事で出かけた先で事故に遭ったらしい。山の奥にある別荘で、その仕事をすることになっていて、そこに向かっている途中で・・・その前日は大雨が降っていて、地盤が柔らかくなっていた。

「少し考えれば・・・いや、考えなくても、危険があることは分かっていた筈なんだ。でも、結局当事者にならないと分からないんだよな？二人もきっと、自分の身にそんなことが起こるなんて思って無かったんだ」

「私だって思わないよ」

「そうだな。あたしと華だってそうだった・・・聞いた時は、とても信じられなかったよ」

その気持ちは、私も分かる。

父さんが病に伏して、助からなかった時、私も母さんも、その現実を受け入れることができなかった。それでも・・・どれだけ願っても、その現実が変わることなんてあり得なくて、結局は受け入れるしかないんだ、って、無理矢理に受け入れた。

今は、昔の様に笑っていられるけど、それは晴ちゃんの御陰でもある。

落ち込んでいた私たちを、いつも励ましてくれた。

でも、やっぱり私は子供だったから、晴ちゃんにはお父さんもお母さんもいるから、そんなことが言えるんだよ、って怒ったりもしてしまった。

それでも、晴ちゃんはずっと励ましてくれて、その明るさに次第に私も母さんも笑顔を取り戻していった。

晴ちゃんには、助けられてばかりで、だけど、まだ何も返すことができていない。

早く戻ってくると良いんだけど。

「でも、結局それは現実で、受け入れるしか無かったんだよな・・・それからは、あたしも華も変わった。でも、良い方向じゃなくてさ・・・あたしは喧嘩とかするようになって、華は前の明るさが全く無くなって、本ばかり読むようになった」

「それは、今も？」

今日の華ちゃんと柊さんを見ての感想だけど、二人の間に距離があるわけでは無いと思う。柊さんに頭を撫でられていた時の華ちゃんの顔は、確かに「妹」の顔だったし、柊さんは「姉」の顔だった。

「分からない・・・ってのが、正直な所だな。変わってしまったから、どこで戻れば良いのか分からないんだよ」

「そんなもんなんだね？」

「そんなもんなんだよ」

「・・・・・・お休み」

「ああ」

リモコンで電気を消して、目を瞑ると、急に静かになった所為か、華ちゃんの規則正しい寝息が大きく聞こえた。

開けていたドアからモモちゃんが入ってきて、静かにベッドに飛び乗って、丸くなったのを見て、私の意識は闇に落ちた。

＊

「なんだ、寝てなかったのか？」

「なんか、寝付けなくてな・・・」

寝る前にあんな話しするんじゃなかったな・・・色々思い出してしまった。

「お袋さんは？」

「ついさっき部屋に戻った。モモが来てたろ？」

ああ、そういえば来てたな。器用に百合河の上に乗って丸くなっていた。

「いや、それなんか関係あるのか？」

聞くと、お袋さんがモモを部屋の前に連れて行ったらしい。全く気付かなかった。

「それより、眠れないならなんかテレビでも見るか？小さい音なら、問題ないって、言われてるし」

特にやることも無いから、あたしは頷いてテーブルに腰掛けた。千同がリモコンでテレビを点け、チャンネルを色々変えているが、結局なにも見つからなかった様で、特に面白くもない番組の所でそれを止めた。

その番組は、何か芸人が街を回る内容だったが、詳しいことは何一つ分からない。

途中からなんだから当たり前っちゃ当たり前だが。

あたしも千同も、なにも喋らずテレビを見ていたが、暫くして千同が口を開いた。

「お前さ、百合河のこと、どう思う？」

いきなり何を言っているんだろうか、こいつは。

そう思ったが、何も話さないよりはマシかと思って率直な感想を言うと、千同は笑った。

「オレは面白いと思ったよ。なんか色々な意味でな」

「確かに・・・ホント、面白いもんだよな？あたし達、今日会ったばかりだってのに、家に招待されて、昼飯と晩飯を食わせて貰って」

「風呂も借りて、どういう流れか泊まることになって・・・考えもしなかったよ」

「あたしだってそうさ。なあ、明日どっか行かねえか？」

「どこにだよ？」

「どこだろうな？」

「何だよそれ」

千同は笑いながら言って、またテレビを眺め始めた。

あたしも同じように、またテレビに視線を戻すと、もう番組は終わっていて、次にある番組の内容を少しだけ紹介していた。

「なんかさ・・・高校って、もっと退屈な所だと思ってたけど、意外とそうでもないんだな？」

「そうかも知れないな？あたしも、これからの二年には少しばかり期待が持てるよ」

あたしのことを知らないからだろうが、百合河も千同も他の奴みたいに、怖がって声を掛けてこないなんてことをしない。別に知られた所で、あたしは何とも思わないだろうが・・・そうだな・・・華とは三年間、仲良くしてもらいたい。

あたしと華も、仲が悪い訳じゃない。良好とも言えるだろう。でも、あたしはどうしても一年早く卒業してしまうから・・・まさか留年する訳にも・・・いや、それもいいか？

まあ、いいか。とりあえず、この一年は思うように過ごそう。

「なあ、色々教えてくれよ？学園祭とか、体育祭とかさ」

「ん～？教えるっつっても、あたしどっちも真面目に参加してなかったからな。それでもいいのか？」

「おう。まあ、雰囲気だけでも教えてくれればな・・・あ、後、校内で迷わないようにするにはどうすればいいかも」

「悪い、それは無理だわ」

「ハハ・・・だよな」

いくら一年早く、入っているからと言っても流石に校内で迷わない方法は知らん。

というか普通は数日で慣れるからな・・・。

「月曜から頑張れよ？」

「・・・・・やっぱりそうなるよな」

「ああ」

まあ、その内それが当たり前になるんだろうな。

「いっそのこと紐で手首を結ぶか？」

「それはどうかと思うぞ？」

とりあえず、明日は何があるか楽しみだな。

こんな感覚は久しぶりだ。

## 方向音痴少女の外出

「おはよう～」

「にゃ～」

『おはよう（おう）（おせえよ）』

起きると、既に華ちゃんも柊さんも起きていて、布団の上で寝ていたモモちゃんを抱えて降り挨拶をすると、母さんと華ちゃんは普通に返してくれた。修くんも、まあ、普通だと思う。でも、柊さんの「おせえよ」はどうかと思う。

まあ、いいや。

修くんは、また母さんの手伝いをしてくれている。華ちゃんは本を読んでおり、柊さんはテレビを眺めている。

私は椅子に座りながら言った。

「遅いって言っても、まだ七時だよ？」

休日にしては早いと思うけど。

「遊ぶ時間が少なくなるだろうが」

「遊ぶって？」

「今日は、わたしたち全員で遊園地に行くことになった」

聞き返すと、華ちゃんは簡潔に説明してくれた。

それは、良いけど・・・遊園地か・・・私にとっては危険な場所だな。可愛い物も結構あるから、それに気を取られてあっちに行ったりこっちに行ったりしちゃうし。前に三人で行った時も、何度迷いそうになったことか。

詳しく聞くと、発案者は母さんらしい。

高校生は一生に一度しかできないんだから、休みはの日は家にいるんじゃなくて楽しいことを見つけて思いっきり遊びなさい、と。

「勉強は最低限やっていればいいわ。わたしも高校の頃は、いつも修くんに連れ出されて色んな所に行ったから・・・楽しいことは沢山経験しないとね」

確かに。

私が産まれた後も、父さんのそのアグレッシブな所は変わらず健在だった。私も母さんも休みの日はいつも父さんに起こされて、眠い目を擦りながら準備をして、でき次第引っ張って行かれた。

何も知らない人が見たら誘拐に見えてたと思う。

今では良い思い出だけど。

父さんの遺影を見ながらそんなことを思う。

行き先は、この辺ではメジャーな「マリンゴールド」と言う遊園地で、水を使ったアトラクションが全体の約七割くらいを占めている。だからなのか、普通に園内を歩いているとどこからか突然水が飛んでくることがあるため、雨具を持ってくることを、園側も勧めている。

それなら入り口で配れば良いのに、と思うけど、要らないと言う人もいるからね。

ちなみに私たちは要らない方です。

父さんがね・・・

『いつ飛んでくるか分からないから楽しいんだろう！』

なんて言っていたからか、私も母さんもそう思うようになった。

うん、何度ずぶ濡れになったことか・・・。

＊

「到着！」

「うるせえ」

「あいた」

遊園地に着いて、声を張り上げると柊さんに叩かれた。なにげに力が強く、結構痛かった。

後頭部を押さえながら、鞄のチャックを少しだけ開けると、そこからモモちゃんが頭だけをひょっこりと出して、辺りを見回す。可愛いな～。そして、私と目が合うとにゃ～と鳴き、また中に引っ込んだ。

「モモってさ、オレ達の言葉分かってるよな？」

「うん。そうとしか思えないよね？」

「世の中面白い猫ってのはいるもんだな」

「そうね・・・大人しいし、意思をハッキリ表現するものね」

母さんの言葉に、昨日風呂上がりに頭に飛び乗ってきてすぐに降りたモモちゃんを思い出す。華ちゃんの言ったとおり、濡れていたからだろう。

今の所、私が知っているモモちゃんの意思表示は、これと、もう一つは昨日の朝にモモちゃんを降ろそうとした時。降りるのを明らかに嫌がっていた。

「ほら、モモについての考察は後にして、早く中に入るぞ？」

柊さんに言われて、私たちは入場券を買い中に入った。

休日と言うこともあってか、やはり中は外よりも多いに盛り上がっていた。

懐かしい感覚に浸っていると不意に右手首を握られて、見るとそれは修くんの手だった。面倒をお掛けします。

それを見て、母さんが若いって良いわね・・・なんて言っていたけど、母さんも十分若いと思う。

とりあえず、絶叫系を先に済ませようと柊さんが言って、私たちはジェットコースターから乗ることにして、その後も色々乗りまくった。

で、その結果

「・・・・・・」

修くんが限界を迎えました。

「だらしねえな・・・あれくらいでダウンしやがって」

「お前な！あれで、ダウンしない方がおかしいだろ！なんだよあれ！一回機体が宙に浮いたぞ！」

「それくらいで一々騒ぐなよ」

「『くらい』、で片付けられるか！もし落ちたらどうすんだ！」

「落ちる訳ねえだろ？ちゃんと計算とかされての設計なんだからさ」

うん、確かに。

というか適当にあんな物を作られたら、その遊園地は信用を一気に失うと思う。

言い合っている修くんと柊さんはとりあえず置いておいて、

「お昼どうする？」

私は華ちゃんと母さんに聞いた。

今、関係ないことだけど、この二人並んでると姉妹に見える。

「ハンバーガーか何かで良いんじゃない？この後に乗るのは、そんな叫ぶ物じゃないし、少し重い物食べても大丈夫でしょ？」

「そうだね。華ちゃんもそれでいい？」

「いい」

という訳で、お昼はハンバーガーに決定した。

けど、修くんと柊さんがまだ言い合っていたから、私たちはベンチに座って終わるのを待つことにした。

「空が青いわね～」

＊

昼食を済ませてからは、メリーゴウランドやコーヒーカップと言った大人しい乗り物に乗って遊んだ。陽が傾いて来た所で、最後の占めに観覧車に乗ることにして、私と修くん、母さんと華ちゃんと柊さんで分かれて乗った。

「楽しかったね」

「ああ・・・昨日の夜さ」

答えた修くんが急に話題を変えた。

「柊が下に来たんだ」

「え、そうなの？」

「ああ、なんか眠れなかったらしい。それで、テレビを見ながらお前のことどう思ってるかって聞いたんだ・・・なんて言ったと思う？」

「え～・・・柊さんでしょ？う～ん・・・生意気？」

言うと修くんは、自覚してたんだな、と笑いながら言って答えを教えてくれた。

「『子供っぽい』ってさ」

「え？」

「意外か？」

「うん・・・もっとむかつくこと言われるかと思った」

「はは。なんかさ、自分が言ったことに一々突っ掛かってくる所とかが、そう思うんだとさ」

そんなの向こうだって同じじゃん。

そう思ったのが、なんとなく分かったのか、修くんはまた笑った。

「似たもの同士だって、海野が言ってただろ？」

「うん。不本意だけど」

「向こうもそう言ってたよな？でもさ、本心は分からないだろ？今はそう思っててもいつかは二人とも素直にそう思う様になるんじゃねえか？」

「ならないと思うけど」

「まあ、いいじゃねえか。そんでさ、そう言った時、あいつ笑ってたんだよ。無意識かどうか知らねえけど。だから、本心ではお前のこと、嫌ってはないんだろうな・・・それに、少しでも嫌ってたら、昨日の時点で家に帰ってるだろうし」

そう言われると、確かに・・・って思う。

「・・・・・・・」

「オレ達さ、昨日会ったばかりだろ？それなのに、今はこんなに近くにいる」

「あ、そっか・・・」

「これも、柊と話したことだけど・・・面白いよな？」

「・・・そうだね」

外を見ながら言った修くんの言葉に、私も外を見て答えた。

私たちを乗せた観覧車は、その後もゆっくりと廻っていた。

## 方向音痴少女の担任とクラス委員

「改めまして、私は百合河菊です」

「オレは千同修輔。まあ、よろしく」

そう自己紹介すると、クラスからパラパラと拍手が上がった。その中には華ちゃんもいたから嬉しかった。

「ほんとに良かったよ・・・初日から何か事故に遭ったりしたんじゃないかって心配してたんだから」

そう言ったのは、私たちの担任である、湯前杏先生(ゆのまえあんず)。華ちゃんの言っていた通り、黒いスーツを着ている。

髪は、灰色?そんな感じの色だけど、艶があって綺麗だ。瞳は朱と蒼のオッドアイで、どちらの瞳も綺麗で、とても優しい色をしている。

それと、朝、謝りに行った時は二人まとめて抱きつかれて、泣いていた。それだけ本気で心配してくれていたんだろうな・・・制服が少し濡れちゃったけど、そこは気にしない方向で行こうと思う。

「すいませんでした」

「いいの。何も無くて、本当に良かった」

この人は、教師が天職かも知れない。

「さて、自己紹介も済んだ所で席に着いてくれるかな？」

「あ、はい。行こうか？」

「おう」

教壇から降りて、机に向かおうとすると

「お？」

手を握られた。

見ると、それはやっぱり修くんだった。

「千同くん。いくら菊でも、教室で迷子にはならない」

私が言おうとしていたことを、そっくりそのまま華ちゃんが言ってくれた。

「ああ、いや・・・なんか、無意識に」

「はは。まあ、仕方ないかもね？」

そう笑い合いながら、私と修くんは席に着いた。先生が今日の連絡事項を話している間、何か視線を感じたけど、何だったんだろう？

ＨＲが終わり先生が出て行くと、華ちゃんが私たちの所に来た。

「二人は、部活見学どうするの？」

今日は、学校が始まったばかりだから午前中は普通に授業があるけど、午後はレクリエーションで各自部活見学をすることになっている。

その質問に答えようとしたら、何人かの女子生徒が私たちの方を見ていた。男子生徒も少数だけど、同じように見ている。

「どうした？」

「ん？あ、ううん、なんでもない。部活のことだけど、私は適当にブラブラするだけで、どこにも入るつもりはないよ？修くんもだよね？」

「ああ。授業が終わってまで学校にいる意味が分からんしな」

「はは。華ちゃんは？」

「わたしは文芸部に入る。姉さんしかいないから、今年誰も入らなかったら廃部になってしまう」

文芸部か・・・華ちゃんにはピッタリな気がする。でも、柊さんが文芸部と言うのは意外だ。でも、多分だけど・・・華ちゃんの為に創ったのかな？華ちゃんのこと、本当に可愛いみたいだし。

兄妹がいない私としては、少し羨ましい。

「あいつしかいない、って・・・この学校、結構な人数がいるじゃねえか」

兄妹欲しいな・・・と思っていると修くんがそう言った。

華ちゃんが答えようとした時、チャイムが鳴って同時に杏先生が入ってきた。席を立っていた人達はみんな席に戻る。勿論、華ちゃんも・・・・。

クラス委員の号令で挨拶をして早速授業に入る。

担任を持っているからだろう。自己紹介はもう一度名前を言うだけで終わった。

先生の担当科目は数学全般。

高校の授業は難しいと思っていたけど、先生の教え方はわかりやすくて、字も丁寧だから見やすかった。

でも・・・

「気に入らねえな?」

そう。

気に入らない。

「それじゃあ、この問題を・・・」

先生が誰かに当てようと振り向くと、皆一斉に目を反らしたり、顔を下げたりした。さっきまでは、食い入る様に見ていた癖に。

顔を上げていて、目を反らしていないのは、私含め四人だけだった。
私と修くんと華ちゃん。
そして、クラス委員をしている背の高い女子生徒。
先生は力ない声で、じゃあ、海野さん、と華ちゃんを指名した。
「はい」
返事をして、黒板に向かい問題を解いていく。
「できました」
「・・・・・・うん、正解。バッチリよ」
笑顔で言って、先生は華ちゃんの頭を撫でた。小学校みたいだな、と思ったけど、こういうのも良いなとも思った。
ありがとうございます、と言って華ちゃんは席に戻った。
私と修くんは、見合って頬笑み、クラス委員の人もうんうんと頷いていた。
その後も、先生が当てようとする度に同じことが起こって、私たちが手を挙げて問題を全部片付けた。
四つ問題が出された時に、クラス委員の人が問題を解きながら自己紹介してくれた。

「私は椎名沙織。よろしくな？」

「うん。よろしく、さっちゃん」

「・・・さっちゃん？それは、私のことか？」

「え？うん、『沙織』だから『さっちゃん』。駄目かな？」

修くんは、何故かため息をついていた。

華ちゃんは、とっくに問題を解き終わっている。でも、席には戻っていない。

「さっちゃんか・・・そんな風に呼ばれたのは初めてだな。いいだろう、是非ともそう呼んでくれ」

「うん。あ、私のことは『菊』でいいから。で、こっちは『修くん』」

「は！おい、止めろよ？修くん、なんて呼ぶのはこいつだけで十分だからな？」

「心配せずとも、二人の間に入るつもりはないさ」

さっちゃんは、そう言って問題を解き席に戻った。その後を追って華ちゃんも席に戻り、教壇には私と修くんと杏先生が残った。

授業を長引かせる訳にもいかないから、問題を解いて先生に確認して貰うと、華ちゃんと同じように頭を撫でてくれた。どこかくすぐ

ったくて、でも心地よかった。

モモちゃんも、撫でられた時はこんな感じなのかな？

席に戻ると同時にチャイムが鳴り、高校最初の授業は終わった。

教室を出て行く時、先生に手を振ると少し恥ずかしそうにしながらも振り返してくれたから嬉しかった。

窓を開けて桟に腰掛けると同時に華ちゃんがやってきて、後ろからさっちゃんも来た。

修くんは私の椅子の背もたれを抱え込むようにして座っている。

「いきなりだが、入学式の時はどうして来なかったんだ？」

「ホントにいきなりだな・・・まあ、オレは日にちを一日勘違いしてたんだ」

「で、道に迷った私が道を聞こうと何軒か立ち寄った所で、修くんの家に着いて、そのまま一緒に来たんだけど結局間に合わなかったの」

「ふむ・・・千同の方は分かったが、菊はどうして迷ったのだ？」

「方向音痴なもので」

「・・・成る程？」

疑問系でさっちゃんは言った。

「三人は、知り合いの様だが？」

気を取り直して、と言った感じで聞かれて、私達は交代しながら事情を話した。家に泊まったことや遊園地に行ったことも含めて。柊さんのことを言った時に、何か驚いていたけど、何だったんだろう？

昼休み。

私と華ちゃんとさっちゃんはお弁当を持ってきているけど、修くんは学食だと言うので、教室で待っていることにした。少し話しをしていると、携帯が鳴って見ると「修くん」の三文字が出ていた。

「千同くん？」

「うん。なんだろう・・・もしもし？」

『よう』

「・・・・・・」

何も言わずに切った。

「千同じゃないのか？」

「うん、間違い電話だった」

と、また携帯が鳴り見ると、今度は「柊さん」の三文字が出ていた。

『お前！無視すんなよ！』

「お掛けになった電話番号は現在使われていないか、柊さんからの着信を拒否しております」

『面白いこと言うじゃねえか・・・まあいい。今千同と学食にいるから、お前らも弁当持ってこい』

いいな、と言って一方的に通話を切られた。

「はあ・・・」

「どうした？」

「柊さんが学食こいってさ」

「柊って、あの柊か？」

「どの柊かは分からないけど、『柊』には違いないよ。修くんもいるって・・・私たちは行くけど、さっちゃんは？」

携帯を畳んでポケットにしまい、立ちながら聞くと、

「・・・・・・行く」

と、暫く考え込んで言い、立ち上がった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5346z/

---

方向音痴少女は今日も行く！

2011年12月21日20時52分発行